（書式２）

＜事務局使用欄＞**受付番号：**　　－

「西安交通大学サマースクール参加報告書」

京都大学文学部学部４回生　（横井啓人）

私は今回のプログラムを数えると、合計７回中国に行ったことになる。一回目から四回目までは中学生の時に父の単身赴任先である上海へ度々旅行へ行っていた。五回目は一昨年の浙江大学のプログラムに参加し、六回目は去年の夏に南京大学で一ヶ月ほど中国語を学びに行っていた。そして今回の西安交通大学サマースクールと言うわけなのだが、今回の西安へのプログラムには私自身特別な思いを抱いていた。

その思いというのは大きく分けて二つある。第一には、自身の学問に直結するものである。私は文学部で日本史を専攻していて、専門は日本古代史、特に奈良時代の政治制度を今は中心に取り組んでいる。奈良時代と言うと、平城京を中心として諸政治制度が完成し、律令に基づいた国の統治がおこなわれていた時代である。その平城京も律令も、そして仏教などの文化やその他文物は、ほとんどがこの時代に中国からもたらされたものである。自身の研究するもののルーツを西安で学び感じ取ることで、自身の学問領域の更なる深化が得られると思い、このプログラムに参加した。また第二としては、院に進んだ後に中国に留学したいという気持ちがあったからである。自身は院進学希望で、院に進学した際には修士課程で中国に長期留学しさらに研究に精を出したいと思っている。そのために研究分野をさらに勉強することも重要なのだが、それ以上に中国語を使いこなさなければならぬ。そのため現在でも独学で中国語を勉強しているのであるが、やはり言語として使うためには現地で使った方が訓練となると考えたため、今回のプログラムに参加した。

上記の二つを特に意識して今回のプログラムに臨んだが、その結果は上々であったと言える。まず現地の博物館や遺跡を観察し、また西安の街のつくりを実際に見る事で大いに考察する所があった。まさに百聞は一見にしかずである。そして中国人学生と積極的に中国語で話し、また中国人にも中国語で会話を試みる努力をしたことで、自身の中国語運用能力が格段に向上したと考えている。一〇日間しかない短いプログラムであったが、そこから感じ、学びとる所は多かった。

この留学によって自身の研究分野に対して一段の意欲が湧いたのと同時に、自身の中国語能力に自身がつき学習の動機づけとして大変良いものになった。この経験を糧に残りの学部生生活で質の良い勉強を心掛けると同時に、院進学後の研究者としての道の中で幅広い学問的視野を身につけていこうと思う。